

# 『日本語話し言葉コーパス』を用いた「全然」の変化の詳細化

佐野 真一郎 (国際基督教大学) †

## Anatomy of the Change of *Zenzen* Using the Corpus of Spontaneous Japanese

Shin-ichiro Sano (International Christian University)

### 1. はじめに

本研究では、近年話し言葉において顕著に用法の変化が見られる日本語の陳述副詞「全然」を取り上げ、この変化の様相を『日本語話し言葉コーパス』を用いて定量的に明らかにする。「全然」は他の語を伴って現われ(呼応)、その語の意味を強調する機能があるが、昭和前期以降「全然」と呼応する語は「全然大丈夫ではない」、「全然良くない」、「全然おいしくない」などのように打消しの言い方や、「全然違う」、「全然だめ」などの否定的意味を持つものであり、「全然大丈夫」、「全然良い」、「全然おいしい」などの肯定的なものは誤りであるとされてきた(広辞苑第6版)<sup>1</sup>。しかしながら、従来誤りとされてきた肯定的用法が近年増えつつある。この用法の変化について、これまでの研究では主に「全然」自体の意味に目が向けられ、また自然発話が定量的研究の対象とされた例はない(若田部 1991、鈴木 1993、新野 1997、野田 2000 他)。

そこで本研究では、「全然」の変化を他の表現との共起関係における文法変化として捉え、その変化の様相を定量的に捉えることを目的とする。具体的には、「全然」を呼応する表現により 1) 否定辞(例、「全然～ない」)、2) 伝統形(例、「全然違う」)、3) 革新形(例、「全然良い」)の3種類に分類し、自然発話を対象としてそれぞれの使用実態・経年変化、及び様々な要因が持つ変化への影響を求めた。以下、第2節では「全然」の用法の変遷を概観する。第3節においてデータ収集、分類・分析方法を述べ、第4節で『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析を行う。最後に第5節で結論を述べる。

### 2. 「全然」の変遷

前節では、「全然」の変化の否定的用法から肯定的用法という一側面を見たが、「全然」の変遷は「否定から肯定へ」のように単純に捉えられるものではなく、複雑な道筋を辿ってきた。「全然」は江戸後期に中国語からの借用語として日本語に入ってきた。これが日本語として定着・確立するのは明治40年代以降で、この時代の「全然」は否定的にも、否定辞を伴わずに肯定的にも使うことができた。つまり、現在誤った用法と見なされている肯定的用法がかつては正しい用法だったということである。このことは以下の文学作品においても確認できる。

- (1) そこで三人が全然翻訳権を与次郎に委任する事にした (夏目漱石 三四郎)
- (2) この老婆の生死が、全然自分の意志に支配されているということを意識した (芥川龍之介 羅生門)

(1)、(2)は、明らかに文中に否定辞がなく、否定的な呼応表現と一緒に現れてもいないが、このような用法が明治では正しいものとして使われていたということを示している。以降、元々正しい用法だった肯定的用法が誤りとされ、否定的用法のみが正しいとされるように

---

† shinichiro@icu.ac.jp

<sup>1</sup> 「全然」の肯定的用法について、その存在を全く否定しているわけではなく「俗な用法で、肯定的にも使う」としている。

なるのであるが、明確な理由は明らかになっていない。しかしながら、大正期の終わり頃から肯定的用法が使われなくなり、結果として否定的用法のみが正しい用法とされるようになったと言われる。近年増えつつある用法が示すように、そこから再度肯定的用法が使われるようになるのであるが、それは昭和 20 年以後であると言われている（鈴木 1993）。これまでの「全然」の肯定的・否定的用法に関する変化の流れを図 1 にまとめる。



図 1 「全然」の用法・呼応表現の変遷

このように見ると、否定的用法に関しては一貫して使われており、この意味では変化がないが、肯定的用法に関しては元々使われていたものが昭和前期頃から使われなくなり、昭和後期頃から再度使われ出したということが見て取れる。つまり、肯定・否定の二項対立に限って言えば、「全然」の変化は「否定から肯定へ」ではなく、「肯定的用法の復活」の方が事実を正しく反映しているとも言える。また、呼応表現の観点から考えれば、「全然」は元々否定辞以外の多様な呼応表現とも共起していたが、昭和前期頃からその呼応表現が否定辞や否定的な意味を持つものに限定されるようになり、昭和後期頃から再度多様な呼応表現を許すようになったと言える。言い換えれば、昭和前期から後期にかけてのみ呼応表現に制限があったということである。なお、本研究ではデータの性質上、明治から昭和前期にかけて起こった肯定的用法の消失に関わる変化については対象とせず、昭和後期から始まり、近年多く観察されるようになった肯定的用法の拡大に焦点を絞ることとする。

### 3. データ収集、分類・分析方法

本節では、分析の前提となるデータ収集、分類・分析方法について述べる。まずデータ収集では、『日本語話し言葉コーパス』の全 3,302 講演（コア・ノンコア）を対象とした。TRN-SJIS フォルダに格納される「転記テキスト」（拡張子.trn）を用い、片仮名表記の「ゼンゼン」という文字列で検索した。「全然」については、文字列のみによる検索で十分な絞り込みができるため、その他の形態論情報などは参照していない。次に、文字列による検索で収集した用例を文脈を参照し精査する。その基準は以下の通りである。

1. 応答：対話において、前発話に対する「全然」のみによる応答（相づち）
2. 形容動詞：「全然」単独で状態を表すもの（例、「全然。」、「全然です」）
3. 言い指し：発話を中断し、そのまま次の発話に移ってしまうもの  
→ 1~3 については、呼応表現との対応が確認できないため除外
4. 言い直し：他の表現に言い換えられた、又は言い換えるために使われたもの（例、「全然  
というか」）  
→ 除外
5. 繰り返し：近距離で「全然」が 2 度現われており、対応する呼応表現が 1 つであるもの  
→ 1 例と見なす
6. その他、間にフィラーが入ったもの（例、「ゼン笑ゼン」）や語断片などの不完全な発話も除外（多くは検索の時点で排除される）

以上の収集過程を経て、今回の分析対象となった「全然」の全用例は 1,534 件である。

次にこれらの用例を分類する。本分析では、梅林（1994）に倣って「全然」をその呼応表現の種類によって「否定辞」、「伝統形」、「革新形」という 3 種類に分類した。図 2 に分

類方法をまとめる。

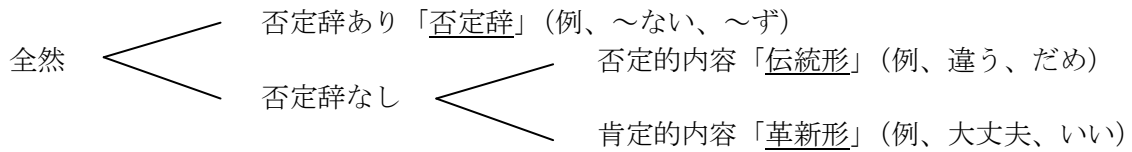


図2 「全然」の呼応表現による分類

まず、呼応表現が「～ない」、「～ず」などの否定辞である場合、これらを「否定辞」とする。次に、否定辞を伴わないものをさらに2種類に分ける。呼応表現が「違う」、「だめ」などのように従来から文法的であると見なされている否定的内容である場合は「伝統形」とし、「大丈夫」、「いい」など近年多く見られるようになった肯定的内容である場合は「革新形」とした（他にも若田部（1991）、新野（1997）などではより詳細な分類があるが、本研究の目的は「全然」の分類ではなく、変化の実態を明らかにすることであるため、今回のデータの分析に過不足がないと思われる3種類とした）。

最後に分析方法に関して、「全然」の分布に影響を与え得る要因によって否定辞、伝統形、革新形それぞれの分布がどのように変わるかということを中心にみる。従って、分析は要因別に進める。本分析で対象としたのは、言語外的要因<sup>2</sup>に相当する生年、講演種、性差、発話スタイルの合計4要因である。生年については「全然」の経年変化を求める際の個別の指標として利用するが、その他3要因についてはこれらの相互作用も検証する。また、以下では主に各文脈に現れる「全然」の比率に基づいて話を進める。

#### 4. 分析

##### 4.1 「全然」、呼応表現の分布

まず、上記の分類方法に従って全用例を分類した。内訳を表1に示す。

表1 「全然」の呼応表現ごとの分布

	頻度	比率
否定辞	1,112	72.49%
伝統形	263	17.14%
革新形	159	10.37%
合計	1,534	100%

表1が示すように、「全然」の約70%が否定辞と共起している一方で、革新形は10%程度となっており、革新形が近年多く見られるようになってはいるものの、依然として否定辞と共起することがほとんどであることがわかる。つまり、変化はまだ初期段階にあると考えられる（後述）。また、伝統形に関しても否定辞と比べると少ないと言える。

次に、否定辞、伝統形、革新形それぞれの内訳を見る。以下に各呼応表現の中で頻度の高かったものを8件ずつまとめる。

<sup>2</sup> 言語内的要因・言語外的要因の詳細については Labov（1994）、（2001）が詳しい。

表2 各呼応表現の内訳（上位8種）

否定辞		伝統形		革新形	
ない	613	違う	198	いい	14
なく	191	別	16	大丈夫	10
なか	160	駄目	14	平気	8
ません	108	変わった（て）	10	普通	4
ず	29	異なる／異質	5	オーケー	3
ねえ	3	少ない	4	うまい	2
なし	2	だけ	3	安全／安心	2
ぬ	2	逆	2	元気	2

まず、否定辞の中でも変異があり、「ない」が613件とほぼ半数を占めているものの、その他丁寧語の「ません」（108件）や「ず」（29件）なども観察された。伝統形の中では、「違う」が198件で過半数を占めている。その他では「別」が16件、「駄目」が14件で続いている。「違う」の多さが際立っているが、この結果は先行研究における、否定辞を伴わない形式では「違う」、「駄目」が多い（野田 2000 他）という主張とも一致する。革新形では、「いい」、「大丈夫」、「平気」という典型的な例が多く観察された。

#### 4.2 全然の変化

次に、「全然」が具体的にどのような変化を辿っているかということ进行分析する。ここでは話者の生年における差を時間の流れに見立てて考える（見かけ時間）。以下に「全然」の経年変化を「否定辞」、「伝統形」、「革新形」ごとにまとめた。

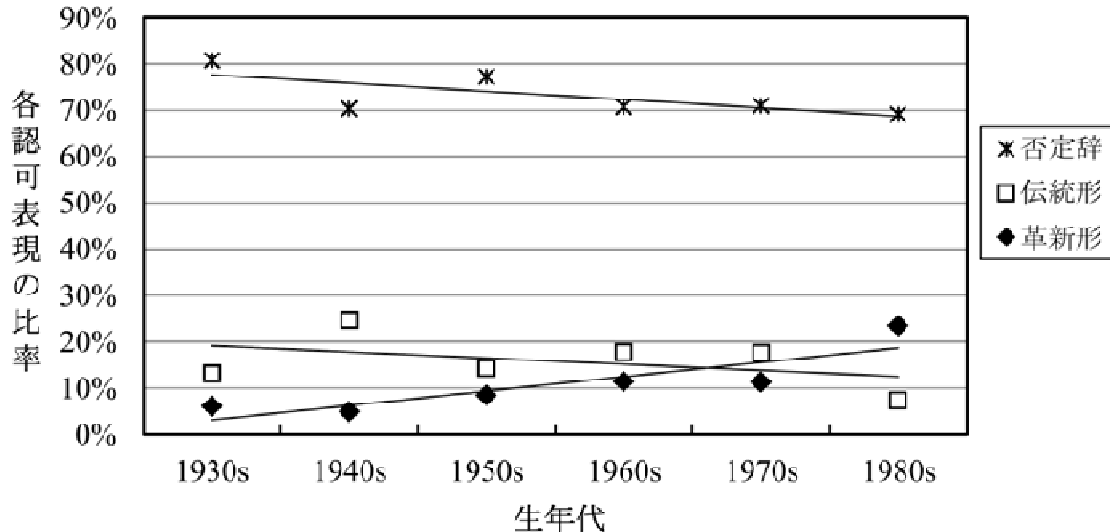


図3 「全然」の呼応表現別経年変化

図3において、否定辞は1930年代生まれの話者（以下、「～年代」とする）から1980年代まで一貫して最も高い比率を示している。また、1930年代で約80%という最も高い比率で、そこから1980年代に向かってほぼ一定の速度で徐々に減少している。伝統形は、否定辞と比べると一貫して低い比率を示している。しかしながら、僅かな変動はあるものの、否定辞の変化と同様の傾向を示し、1980年代に向かって徐々に減少している。また否定辞と伝統形の直線の傾きを比べるとほとんど違いがないことが見て取れる。つまり、経年変化において、両者はほぼ同じ道筋を辿っていると考えられるのである。一方、革新形の変化は否定辞、伝統形とほぼ正反対の性質を示している。1930年代、1940年代で最も低

い比率を示し、そこから 1980 年代に向かってほぼ一定の速度で徐々に増加している。また、比率の最も高い 1980 年代では、否定辞に次いで高い数値を示しており、伝統形の比率を逆転している。

これらの結果から、近年多く見られるようになった革新形が確かに徐々に増加してきているということが実証された。更に、各呼応表現間の関係についても知見が得られた。つまり、単純に肯定的用法が増加してきたということではなく、従来使用されてきた否定辞と伝統形に替わって革新形が使用されるようになるという呼応表現間の役割交替が起こっていると言えるのである。また、伝統形は打消し表現（明示的な否定辞）を伴わないが否定的な意味合いを持つということを考えると、否定的な呼応表現全体が減少傾向にあり、それに代わって肯定的な呼応表現が増加していると考えることができる。図 3 が示すように、肯定的な呼応表現（革新形）が増加し、全ての「全然」の用法のうちある程度の割合を占めるようになったことを考えると、呼応表現を否定辞や否定的な意味を持つものに限定するという制限が弱まり、以前のように否定辞以外の多様な呼応表現とも共起することができるようになりつつあるということも支持される。

このように、経年変化に注目することで、従来注目されなかった各呼応表現間の関係が言語変化の進行過程でどのように変わって行くのかということが明らかになった。つまり、「全然」の変化は肯定的用法だけの問題ではなく、従来の否定的用法にも変化があるということである。なお、今回のデータでは 1910 年代・1920 年代が少なく<sup>3</sup>、肯定的用法が認められていたと思われる時代の分析を行うことができなかった。明治から大正頃までは肯定的用法が見られたことを考えれば、もしこれらのデータを合わせて分析することができたならば、肯定的用法（革新形）の経年変化においてその比率は下降から上昇を描く V 字型になっていたと予測できる。

#### 4.3 講演種

ここでは、講演種の違いによって「全然」の分布がどのように変わるかということを検証する。『日本語話し言葉コーパス』の講演は主に「学会講演」と「模擬講演」に分けられ、前者はあらたまった発話スタイルが特徴的で、後者はくだけた発話スタイルが特徴的である。この学会講演・模擬講演の違いをあらたまった発話・くだけた発話の違いと見なして「全然」の分布を比較する。「全然」の変化があらたまった発話スタイルを選好するのであれば、革新形の比率は模擬講演よりも学会講演で高く、反対にくだけた発話スタイルを選好するのであれば学会講演よりも模擬講演で高くなると予測できる。また、否定辞と伝統形は革新形の分布と反対の性質を示すはずで、変化があらたまった発話スタイルを選好するのであれば模擬講演よりも学会講演で低く、反対にくだけた発話スタイルを選好するのであれば学会講演よりも模擬講演で低くなると予測できる。これは、図 3 が示すように変化の向かう先ではその他の文脈と比べ、新しい形式が増加を示し、古い形式が減少を示すという考えに基づく。以下に結果をまとめる。

表 3 「全然」の講演種別分布<sup>4</sup>

	否定辞	伝統形	革新形	合計
学会講演	68.54% (122/178)	23.60% (42/178)	7.87% (14/178)	178
模擬講演	73.26% (896/1223)	15.62% (191/1223)	11.12% (136/1223)	1223

$$\chi^2 = 7.9617, df = 2, p = 0.01867$$

<sup>3</sup> 生年がそれ以前の話者のデータは『日本語話し言葉コーパス』には収録されていない。

<sup>4</sup> 以下の分析において、分布の有意差をカイ二乗独立性の検定により検証する（有意確率 5%）。また、期待度数が少ない場合は、フィッシャーの正確確率検定も併せて行う。なお、検定には統計プログラム R (version 2.13.0)を用いた。

革新形に関しては、学会講演では 7.87%であるのに対して、模擬講演では 11.12%という比率を示しており、模擬講演で多く現れるということが分かる。また伝統形に関しては、革新形とは正反対で、学会講演では 23.60%であるのに対して、模擬講演では 15.62%と少ない比率を示している。つまり、革新形の比率が高く、伝統形の比率が低いのは模擬講演であるため、このことから「全然」の変化はくだけた発話スタイルを選好していると考えられる。しかしながら、否定辞に関しては仮説と異なり、学会講演 (68.54%) よりも模擬講演 (73.26%) の方が全体の比率としてわずかではあるが高くなっている。

結果として、否定辞では確認できなかったものの、革新形、伝統形においては「全然」の変化がくだけたスタイルに特徴的である、より進んでいるということが示された。

#### 4.4 性差

これまでの言語変異・変化研究において、話者の性別が言語変化において大きな役割を果たすことが実証されてきている。中でも多くの場合、女性が言語変化をリードすると言われている (Trudgill 1972, Labov 1990 他)。従って、「全然」の場合も性差の影響を検証することは重要である。「全然」の変化をリードするのが女性であるならば、革新形の比率は男性よりも女性で高くなり、否定辞と伝統形の比率は男性よりも女性で低くなるということが予測できる。以下に分布を示す。

表4 「全然」の男女別分布

	否定辞	伝統形	革新形	合計
男性	71.11% (544/765)	18.04% (138/765)	10.85% (83/765)	765
女性	73.86% (568/769)	16.25% (125/769)	9.88% (76/769)	769

$$\chi^2 = 1.4583, df = 2, p = 0.4823$$

表4が示すように、「全然」の分布は男女によってほとんど変わらない。つまり、性別に関係なく同じように「全然」を使っているということである。この結果は上記の予測とは異なる。しかしながら、『日本語話し言葉コーパス』では講演種によって男女の構成比が大きく異なる (学会講演では男性の方が多)。この影響を考慮し、講演種別の分布を男女ごとに求めると以下のようなになる。

表5 「全然」の講演種、及び男女別分布

	男性	否定辞	伝統形	革新形	合計
学会講演	67.12% (98/146)	25.34% (37/146)	7.53% (11/146)	146	
模擬講演	72.36% (411/568)	14.96% (85/568)	12.68% (72/568)	568	
	女性	否定辞	伝統形	革新形	合計
学会講演	75.00% (24/32)	15.63% (5/32)	9.38% (3/32)	32	
模擬講演	74.05% (485/655)	16.18% (106/655)	9.77% (64/655)	655	

$$\text{男性: } \chi^2 = 10.4087, df = 2, p = 0.00549$$

$$\text{女性: } \chi^2 = 0.0145, df = 2, p = 0.9928$$

まず女性に注目すると、否定辞、伝統形、革新形の全てにおいてほとんど差がない。つまり、女性に関しては学会講演でも模擬講演でも「全然」を同じように使っているということである。一方、男性は学会講演・模擬講演で大きな差が見られる。具体的に、革新形は学会講演 (7.53%) よりも模擬講演 (12.68%) の方が高い比率を示している。否定辞も同様に、学会講演 (67.12%) よりも模擬講演 (85.00%) の方が比率が高くなっている。伝統形はこれらとは反対に、学会講演 (25.34%) の方が模擬講演 (14.96%) よりも高い比率を示している。ここで、表5の男性の講演種別の分布と表3の講演種別の分布を比べるとほと

んど同じであることが分かる。つまり、講演種別の分布は、女性には差がないため、男性の分布の特徴がそのまま反映したと言える。ここまでで、「全然」の変化において男性には学会講演・模擬講演の差があるが、女性には差がないということが明らかとなった。このことから、女性よりも男性の方が場面によるスタイル差が大きいということが読み取れる。しかしながら、従来の性差・スタイルに関する研究によるとむしろ女性の方がスタイル差が大きいと言われており (Labov 1990 他)、矛盾する結果となる。

この原因として、「顕在的威信」(overt prestige)、「潜在的威信」(covert prestige) とこれらに関する男女の振る舞いの違いの影響が考えられる。女性は公に高く評価されるような「正しい言葉遣い」を好む傾向があり、男性は反対にスラングなどの公には高くは評価されないが、男らしさ・たくましが強調されるような言葉遣いを好む傾向がある (Trudgill 1972)。つまり、女性は顕在的威信を好み、男性は潜在的威信を好むということである。このことを念頭に「全然」の変化を考えると、まず「全然」の肯定的用法(革新形)は公には高く評価されているとは言えない、むしろ誤りであると非難される傾向にある(教育出版、cf. 新野 1997)。従って、「全然」の変化は顕在的威信よりも潜在的威信と結びついていると考えられる。そうすると、男性は潜在的威信を好むため「全然」の肯定的用法を積極的に使い、場面によるスタイル差に敏感に反応する。一方、女性はこのような言語表現については積極的ではないため、場面によって特に意識的に使い方をコントロールするということはないという説明が与えられる。以上のような違いが男女ごとのスタイルの違いとして現われたと考えられる。また、スタイルと性差が言語変化において密接に関係していることが本分析でも実証された。

#### 4.5 発話スタイル

先の講演種に関する分析において、「全然」の変化はスタイルの影響を受ける、その変化は特にくだけた発話において特徴的であるということを確認した。しかしながら、それぞれの講演種の中にもスタイル差があることが予想できる。つまり、学会講演の中でもスタイルの高い講演もあれば低い講演もあるということが考えられる。これは模擬講演でも同様である。従って、講演種とは別にスタイルを検証する必要がある。『日本語話し言葉コーパス』には講演種以外にスタイルを測る方法として「発話スタイル」という指標が付与されているため、これを基にして「全然」の分布を検証する。講演種に関する分析を参考にすれば、革新形の比率はあらたまった発話よりもくだけた発話で高く、否定辞や伝統形の比率はあらたまった発話よりもくだけた発話の方が低いということが予測される。

表6 「全然」の発話スタイル別分布

	否定辞	伝統形	革新形	合計
1	77.44% (127/164)	6.71% (11/164)	15.85% (26/164)	164
2	74.30% (347/467)	15.63% (73/467)	10.06% (47/467)	467
3	71.74% (457/637)	17.74% (113/637)	10.52% (67/637)	637
4	70.68% (94/133)	23.31% (31/133)	6.02% (8/133)	133
5	70.59% (12/17)	29.41% (5/17)	0.00% (0/17)	17

$$\chi^2 = 25.5925, df = 8, p = 0.001233$$

表6における縦軸の数値は5段階の発話スタイルを示している。1が最もくだけたスタイルで、数字が増えるに従ってあらたまったスタイルとなり、5が最もあらたまったスタイルである。革新形に関しては、最もくだけた1(15.85%)で最も高い比率を示していて、発話があらたまるにつれて徐々に下がる。最もあらたまった5では1例も観察されなかった。伝統形に関しては、革新形とは正反対の分布を示している。最もくだけた1(6.71%)において最も低い比率で、そこから徐々に高くなり、最もあらたまった5では29.41%を示している。一方否定辞に関しては、1(77.44%)で高い比率を示していて、わずかではあるがそ

これから5 (70.59%) に向かって徐々に減少する。

この分布は講演種に関する分布と全く同じ傾向を示している。この結果から、否定辞では確認できなかったが、革新形、伝統形においては先述の予測の通り、「全然」の変化がくだけたスタイルに特徴的である、より進んでいるということが再度実証された。

最後に、前節における講演種と性差の関係と同様、発話スタイルと性差の関係を検証する。先述のように、講演種はスタイル差の指標として利用することができるが、それぞれの講演種の中にもスタイル差があることが予想できるためである。これまでの議論において確認された「全然」の変化がくだけた発話スタイルを選好し、且つ男性はスタイルの変化に敏感であるが女性はそうではないという一般化が正しければ、男性の発話では革新形の比率はあらたまった発話よりもくだけた発話で高く、否定辞や伝統形の比率はあらたまった発話よりもくだけた発話の方が低い、女性の発話ではこのような差が見られないということが予測される。この仮説を検証するために、以下に分布をまとめる。

表7 「全然」の発話スタイル、及び男女別分布<sup>5</sup>

男性	否定辞	伝統形	革新形	合計
1	74.31% (81/109)	7.34% (8/109)	18.35% (20/109)	109
2	74.46% (172/231)	16.88% (39/231)	8.66% (20/231)	231
3	70.46% (229/325)	17.54% (57/325)	12.00% (39/325)	325
4+5	66.67% (34/51)	29.41% (15/51)	3.92% (2/51)	51
女性	否定辞	伝統形	革新形	合計
1	83.64% (46/55)	5.45% (3/55)	10.91% (6/55)	55
2	74.15% (175/236)	14.41% (34/236)	11.44% (27/236)	236
3	73.08% (228/312)	17.95% (56/312)	8.97% (28/312)	312
4+5	72.73% (72/99)	21.21% (21/99)	6.06% (6/99)	99

男性： $\chi^2 = 20.2337, df = 6, p = 0.00252$

女性： $\chi^2 = 9.5998, df = 6, p = 0.1425$

表7において、男性は「1」(くだけた発話)から「4+5」(あらたまった発話)まで大きな差が見られる。具体的に、革新形は「1」(18.35%)で最も高い比率を示し、そこから「4+5」(4.65%)に向かって下降する。伝統形はこれらとは反対に、「1」(7.34%)で最も低い比率を示し、そこから「4+5」に向かって上昇する(34.88%)。否定辞のみこのような目立った傾向は観察されなかった。一方女性に関しては、男性と同様否定辞に関しては目立った傾向は見られない。伝統形、革新形では、表面上男性と僅かに似た傾向を示しているものの統計的に有意な差はない。つまり、女性のスタイル差に関しては一般化できるほどの傾向はないということである。このことから、仮説の通り女性に関してはあらたまった発話でも、くだけた発話でも「全然」を同じように使っているということが再度確認できた。

以上のように、性差について発話スタイルにおいても講演種と同様の傾向が観察された。具体的には、「全然」の変化はあらたまった発話よりもくだけた発話を選好しているが、そのスタイル差は男性のみに見られるものである。この原因として、先述の「全然」自体の性質と潜在的威信の関係に基づく説明が可能性として挙げられる。

## 5. 結論

本研究では、「全然」の歴史を概観し、その呼応表現との関係における変化を『日本語話し言葉コーパス』を使って分析した。分析では「全然」の呼応表現を否定辞、伝統形、革

<sup>5</sup> 発話スタイルの5段階のうち、「5」は表7のように細分化した場合極めて観測度数が少なく、統計的に信頼できる結果を得ることが難しいため、隣り合う「4」とカテゴリーの併合を行った。



新形の 3 種類に分類し、変化の様相を視覚化すると共に言語外的要因の影響、及びそれらの相互作用を検証した。分析の結果、以下の点が明らかになった。

- ・ 変化：「全然」の変化は肯定的用法の変化だけでは捉えられず、従来使用されてきた否定辞と伝統形に替わって革新形が使用されるようになるという呼応表現間の役割交替が起こっている。また、呼応表現に関する共起制限が弱まっている。
- ・ 講演種：革新形、伝統形においては「全然」の変化が学会講演（あらたまったスタイル）よりも模擬講演（くだけたスタイル）に特徴的であり、より進んでいる
- ・ 性差：性差はそれ自体では影響を与えていないが、講演種・発話スタイルなどスタイル差に関する要因と相互作用を示し、複合的に影響する
- ・ 講演種・性差：「全然」の変化において男性には学会講演・模擬講演の差があるが、女性には差がない。これには「全然」自体の性質と潜在的威信の関係に基づく説明が可能性として挙げられる。
- ・ 発話スタイル・性差：「全然」の変化はあらたまった発話よりもくだけた発話を選好しているが、そのスタイル差は男性のみに見られる。

その他、言語外的要因に基づく各分布に関して、性別（女性）以外の全ての場合において伝統形が革新形と正反対の分布を示した。つまり、伝統形が多い項目では革新形が少ない、革新形が多い項目では伝統形が少ないという相補分布となっていた。しかしながら、否定辞だけこれら 2 種類とはっきりとした関係が見られず、また振る舞いに一貫性もなかった。このことは、「全然」の変化において、革新形の増加と直接関係があり、革新形に取って代わられるのは否定辞ではなく、伝統形であるという図式を示唆すると共に、伝統形と革新形は統語的に密接に関連していて、否定辞だけが統語上異なる位置付けであるということと一致している。

今後の課題として、要因間の相互作用について本研究では講演種・発話スタイルと性差を検証したが、その他の要因についても研究を拡大する必要がある。また、「全然」の変化は現在初期段階にあるが、今後変化が進行するにつれてこれら要因間の関係がどのように変化するのかということも検証する必要がある。

## 謝 辞

本稿の執筆、及び調査に際し、加藤泰彦氏、日比谷潤子氏のご協力を賜った。ここに記して感謝を申し上げる。なお、本稿における不備は全て筆者に帰するものである。

## 文 献

- Horn, Laurence (1972) *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*, Ph.D. dissertation, UCLA.
- Horn, Laurence (1989) *A Natural History of Negation*, Chicago: The University of Chicago Press. [reissued by CSLI, 2001].
- Horn, Laurence (ed.) (2010) *The Expression of Negation*, Berlin/New York: De Gruyter Mouton.
- Jespersen, Otto (1917) *Negation in English and Other Languages*, Copenhagen: Andr. Fred. Host & Son, Kgl. Hof-Boghandel.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, Ph.D. Dissertation, Sophia University.
- 加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美(編) (2010) 『否定と言語理論』、開拓社

- Klima, Edward (1964) "Negation in English," in Jerry Fodor and Jerrold Katz (eds.), *The Structure of Language*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, pp.246-323.
- Labov, William (1990) "The intersection of sex and social class in the course of linguistic change," *Language variation and change* 2, pp.205-254.
- Labov, William (1994) *Principles of linguistic change: Internal factors*, Oxford: Basil Blackwell.
- Labov, William (2001) *Principles of Linguistic Change vol.2: Social Factors*, Oxford, UK: Blackwell.
- 新野直哉(1997)「"全然"+肯定」について、『国語論究 第6集 近代語の研究』、pp.258-286、明治書院
- 野田春美(2000)「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22:5、pp.169-182、計量国語学会
- 太田朗(1980)『否定の意味』、大修館書店
- 鈴木英夫(1993)「新漢語の受け入れについて—「全然」を例として—」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』、pp.428-449、明治書院
- Trudgill, Peter (1972) "Sex, covert prestige and linguistic change in the urban British English of Norwich," *Language in Society* 1, pp.179-195.
- 梅林博人(1994)「副詞「全然」の呼応について」『国文学解釈と鑑賞』59:7、pp.103-110、ぎょうせい
- van der Wouden, Ton (1997) *Negative Contexts: collocation, Polarity, and Multiple Negation*, London: Routledge.
- 若田部明(1991)「「全然」の語誌的研究—明治から現代まで—」『解釈』37:11、pp.24-29、教育出版センター
- 吉村あき子(1999)『否定極性現象』、英宝社

#### 関連 URL

教育出版『「全然すばらしい」という言い方は正しいか』

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/view.rbz?nd=1750&ik=1&pnp=101&pnp=113&pnp=566&pnp=1750&cd=19>